

年頭にあたって

放射線医学総合研究所 理事長 米倉 義晴



新年明けましておめでとうございます。
5年間の第二期中期計画もいよいよ最終段階に入りました。4月からの第三期中期計画に向けて、「世界の放医研」、「見える放医研」、「歴史に残る放医研」を基本として、放医研の将来を見据

えた組織の再構築を進めています。

独立行政法人に対して国民の厳しい目が注がれる中で、放医研の活動をわかりやすく社会に説明する努力が極めて重要となっています。国民の意識調査をまとめた最近の報告書を見ますと、残念ながら放医研の認知度はまだまだ低いと言わざるをえません。この認知度は国民の好感や信頼度と明らかに関連しており、放医研の活動を幅広く知っていただくためのより積極的な努力が求められています。

昨年は、国際原子力機関(IAEA)の協働センターとしての活動や、緊急被ばく医療支援チーム(REMAT)の立ち上げなど、放医研の国際活動に重点を置いた取り組みを行いました。「世界の放医研」としての活動実績を積み重ねるとともに、国内外においてその存在感が「見える放医研」に貢献するための重要な一年であったと思います。

世界中にグローバル化の波が押し寄せており、どの国や地域も単独で物事を解決できる状況ではなくなっています。その中で、すべての組織や個人が、いかに世界的な視野で判断し活動するかが求められています。放医研の国際化は、直ち

に対応しなければならない緊急の課題です。その先駆けとして、放医研では国際オープンラボラトリーを3年前に発足させました。世界トップレベルの研究者を招へいし、その指導の下に若手研究者の国際交流を進めるという方針は、国内外からも評価されるようになりました。国際的な共同研究による成果に加えて、所内には常に海外の研究者や学生を見かけます。しかし、逆に放医研から海外の機関に出かけることはそれほど多くないようです。放医研の真の国際化には双方向の交流が不可欠であり、今後は海外に職員を派遣することも積極的に進めていきたいと思ひます。

最近の学生の意識調査によると、海外への留学を希望する学生が減少し続けていると報道されています。わざわざ海外の研究機関で苦勞しなくても、日本でもそれなりの仕事ができるというのが大多数の意見のようです。確かに、以前に比べると、日本の大学や研究機関における研究環境はそれなりに整備されてきており、あえて言語や生活の不便な海外での研究生活を望まないということになるのでしょうか。しかし、海外での経験は、優れた指導者のもとでお互いに切磋琢磨する同僚や、異なる文化の人々との交流という他では得難い体験につながります。特に若い方々には、常に挑戦する勇気を持って国際活動に貢献していただきたいと思ひます。そのような活動の経験や成果は、必ず将来に役立つものであり、ひいては「歴史に残る放医研」の強固な礎になるものと確信しています。

今まで何度か紹介してきましたが、ダグ・ハマーショルド元国連事務総長の「はるか地平のかなたを見つめるものが道を見つけれれる」という言葉は、私がとても共感を覚えて大切にしている考え方です。常にしっかりと進むべき方向を見据えて、着実に成果を出していくことを再確認して、新しい年のスタートにしたいと思ひます。

◇ 年頭にあたって 放射線医学総合研究所理事長 米倉 義晴..... 1	目次
◇ NEWS REPORT 放医研と中国大連大学間の協力協定の締結..... 2 那珂湊支所の施設解体作業着工と今後の見通し..... 2 放医研ワークショップ「放射線科学・安全研究分野の国際展開に向けて」... 3	
◇ おしらせ 放医研第2期中期計画成果発表会、第18回放医研公開講座開催案内... 3	
◇ NEWS REPORT 一般公開講座「アジア地域における放射線がん治療と日本の役割」開催報告... 4	

◇ NEWS REPORT 第13回一般講演会「がんに強い人に優しい!重粒子線がん治療」開催報告... 4 分子イメージング研究戦略推進プログラム(J-AMP)キックオフシンポジウム2010開催報告... 5 第5回分子イメージング研究センターシンポジウム開催報告..... 5	次
◇ 栄えある受賞 山谷泰賢氏、志田原美保氏、永野あい氏、藤井啓輔氏が学会賞受賞... 6	
◇ NEWS REPORT 松井真也のウィーン便り(2) 7 高木義明文部科学大臣が放医研をご視察されました..... 8 NIRSテクノフェア2010開催報告 8	

放医研と中国大連大学間の協力協定の締結

放射線医学総合研究所と中国大連大学は、「粒子線がん治療、医学物理及び放射線生物学分野における協力強化に関する取決め」を、平成22年11月8日中国大連大学にて締結いたしました。



写真1：両機関間で覚書を取り交わしました

大連大学は1987年10月に大連市に創立され工学院、師範学院、医学院からなる総合大学です。現在、約2万人の学生が在籍しています。大学付属病院として中山病院と新華病院があり、いずれも医療、教育、科学研究を一体化した大連市三級甲等総合病院です。

調印式では大連大学側から、潘成勝学長、王志強書記をはじめとして多数の幹部の出席があり、潘成勝学長と米倉義晴理事長はそれぞれの機関の活動について概要説明の



写真2：授業中の同時通訳



写真3：大連大学博物館視察中コース体験風景

後に、辻井博彦理事が放医研の5,000例の実績を基に、放医研の重粒子線がん治療の現状を紹介しました。大連大学側は、日本の放射線治療における切らずに直すがん治療技術の高さに非常に強い感銘を受けた様子でした。最後に重粒子線がん治療を中心とする具体的な協力の進め方について意見を交換しました。

翌日に大連大学の日本語文化教育センターと大学博物館を中心に大連大学を視察しました。

今回の協力協定により重粒子線がん治療及び患者受入を中心とした今後の協力関係に、大きな期待が寄せられました。

企画部人材育成・交流課 楊 麗

那珂湊支所の施設解体作業着工と今後の見通し

平成19年12月に閣議決定した「独立行政法人整理合理化計画」に基づき、那珂湊支所は茨城県やひたちなか市等の地元の了解を得た上で、平成23年3月までに廃止することになりました。それ以来、廃止に向け物理的な除染・解体等の作業のみならずそれに伴う関係省庁や自治体等への多くの手続きや申請などを行って参りました。平成22年3月には、研究部門は本所へ移転しております。支所には放射線管理区域がありますが、その中には核燃料物質取扱い使用許可室もあります。まず、核燃料物質使用許可廃止措置計画書を作成し、茨城県原子力安全協定に基づき茨城県とひたち



写真1 解体作業が進む第3研究棟外観

なか市に同意を得た後に、文部科学省より廃止措置計画の認可を平成21年12月に得ました。これに基づ



写真2 解体作業中の那珂湊支所

いて、平成22年6月より放射線管理区域設備撤去工事を開始し、平成22年6月下旬までに核燃料物質の放射性廃棄物の搬出とこれに関する汚染の確認を終えました。その後、RIの汚染検査、除染作業を経て、平成22年11月5日に放射線管理区域を解除しました。そして一般的な建造物として施設の解体工事に着手しました。平成23年3月末までに敷地を更地にして、ひたちなか市へ敷地を返納いたします。

放射線防護研究センター那珂湊支所管理室

青野 辰雄

放医研ワークショップ「放射線医学・安全研究分野の国際展開に向けて」 -NIRS Workshop as an IAEA Collaborating Centre-

平成22年11月11日～12日の2日間の日程で、標記の放医研ワークショップが開催されました。本ワークショップは、平成22年1月から放医研が従来の国際原子力機関(IAEA)協働センターの協力分野である「放射線生物影響」に加え、「分子イメージング」および「重粒子線治療」の分野においてIAEAとの総合的な連携協力をスタートさせたことを受け、放医研の活動について、国内外の方々へ更なる理解向上を図ることを目的として開催されました。



写真1 米倉理事長の開会挨拶と会場内の様子

1日目は主に国内外一般の方々を対象として、東京(アキバホール)で開催し、日英同時通訳や日英併記資料配布など、判り易い講演会となるように心掛けました。会合は、米倉理事長の開会挨拶を兼ねたご講演に始まり、久住原子力安全委員、戸渡文部科学省大臣官房審議官、新井外務省国際原子力協力室長からのご挨拶に続き、IAEAからお招きした原子力科学・応用局ヒューマンヘルス部長のレシー・チェム博士に協働センター活動の使命や役割についてご講演いただきました。IAEA加盟国8カ国からの専門家12名を含む200名近い

方々にご来聴頂きました。開会前および休憩の際には、ポスター形式で放医研5センターの活動内容の紹介も行われました。アンケート結果では、多くの方々から講演について「判り易く、メッセージも印象に残った」とのご感想をいただきましたが、放医研の研究活動について「今までは良く知らなかった」とのご意見もいただきましたので、今後とも引き続き、こうした会合等を通じ、社会に「見える放医研」を目指していきたいと考えております。



写真2 IAEA協働センターのIAEA責任者レシー・チェム博士(左)と放医研村田理事(右)

2日目は各分野の専門家を対象として、IAEA加盟国8カ国からの専門家9名ならびに放医研の専門家の講演が行われ、100名近い方々にご来聴いただきました。ディスカッションでは、人材育成など活発な意見交換がなされました。

最後に、本ワークショップ開催・運営にあたり、多大なるご協力をいただきました方々に厚くお礼申し上げます。

企画部人材育成・交流課 飯田 治三

お知らせ

放医研第2期中期計画成果発表会—安全と医療、新しい放射線の時代へ—

- 開催期日:平成23年1月25日
13:00～19:45
- 開催場所:東京国際フォーラムホールB5
東京駅、有楽町駅に直結
- 定員400名(定員になり次第しめきり)
【参加申込】以下のウェブサイトから事前登録願います。
<http://www.hakushu-arts.co.jp/nirs/>
☎: 03-5818-5916、Fax: 03-3834-4390

- 【主なプログラム】
- 【第2期中期計画成果報告会】
13:00～16:15 5センターによる中期計画の成果発表
- 【市民公開講座】
18:00～19:45 重粒子線がん治療の実績と未来、他2題
- 内容に関するお問い合わせ:
放医研広報課 ☎: 043-206-3026 info@nirs.go.jp

第18回放射線医学総合研究所公開講座(開催案内)

- 開催期日:平成23年2月18日
13:30～16:40
- 開催場所:千葉市美術館(千葉市中央区中央3-10-8、
☎: 043-221-2311)
- 定員140名(事前申込が必要です)
Webサイト(<http://www.nirs.go.jp/index.html>)
【お問い合わせ】
放射線医学総合研究所・広報課
☎: 043-206-3026、Fax: 043-206-4062
E-mail: kouza@nirs.go.jp

- 【プログラム(演題・演者)】
- 1.「富士山と太陽と安全な空の旅
～宇宙に近づいて空の放射線を見張る～」
演者: 保田浩志チームリーダー(放射線防護研究センター)
- 2.「分子で探るころろ」
演者: 須原哲也グループリーダー
(分子イメージング研究センター)
- 3.「肺癌に対する重粒子線治療」
演者: 山本直敬医長(重粒子医科学センター)

一般公開講座 「アジア地域における放射線がん治療と日本の役割」開催報告 ～ FNCA 2010 Workshop on Radiation Oncology

平成22年11月27日に社会文化会館三宅坂ホールにて一般公開講座「アジア地域における放射線がん治療と日本の役割」が開催されました。これは文部科学省が主導するアジア原子力フォーラム(FNCA)の放射線治療プロジェクト(リーダー辻井博彦理事)の活動成果と参加各国への社会的貢献の紹介に加え、強度変調放射線治療(IMRT)や重粒子線治療など我が国の最先端の放射線治療についての解説なども交えた公開講座です。

上記プロジェクトは、バングラデシュ、中国、インドネシア、韓国、日本、マレーシア、フィリピン、タイ、ベトナムの9ヶ国で現在活動しています。アジア地域で発生頻度の高いがん(子宮がん、上咽頭がんなど)に対する最適な治療方法の確立と治療成績の向上、さらにアジア地域における放射線治療の普及を



写真1 各国の演者(左上から時計回りにマレーシア、タイ、ベトナム、フィリピン)

目標に活動を行っており、今回は4ヶ国が各国の放射線治療の現状や、これまでのFNCAの枠組みでの多施設臨床研究の成果等を報告しました。

本講座は文科省審議官の戸渡速志氏と米倉



写真2 公開講座の会場の様子

義晴理事長の挨拶で始まり、元日本原子力委員の町末男氏がオープニング講演としてFNCA活動紹介を行いました。最先端放射線治療講演に続き、辻井博彦理事によるプロジェクトの紹介および前述の各国報告の他、IAEAがん治療アクションプログラム(PACT)局長のMassoud Samiei氏がPACT活動紹介を行い、最後は鎌田正センター長による粒子線治療の特別講演があるなど、がん対策における幅広い情報提供の場となりました。土曜日早朝からの開催にも拘わらず入場者数は320名に上り、がんに対する関心の高さ、そしてアジア地域への日本の役割の重要性について改めて考える機会となりました(写真2)。

重粒子医科学センター 放射線治療品質管理室 水野 秀之

第13回一般講演会「がんに強い!人に優しい!重粒子線がん治療」開催報告

第13回放医研一般講演会は、平成22年11月21日、「がんに強い!人に優しい!重粒子線がん治療 -放医研16年の治療実績から-」をテーマとして、福岡国際会議場(福岡市)に於いて開催しました。本講演会の第1部では「世界最先端、重粒子線がん治療装置」と題し野田耕司物理工学部長が放医研の重粒子線がん治療装置(HIMAC)などにつき講演され、続いて「重粒子線がん治療とその成績」と題し鎌田正重粒子医科学センター長が適用症例や治療の成績についてそれぞれ詳しく紹介しました。

第2部のパネルディスカッションでは「九州初、重粒子線がん治療施設への期待」のテーマで、平成25年に佐賀県鳥栖市で開設予定の重粒子線がん治療施設への期待について、医師・ジャーナリストや治療体験者などによるパネルディス



写真1 参加者で満席になった講演会場の様子

カッションを行いました(写真2)。当日は定員の800名を超える836名と大変多くの参



写真2 パネルディスカッション後の質疑応答の様子

加者がありました。

本講演会を通し、会場の福岡市を始めとする北九州地域の皆さんのがんや重粒子線がん治療に対する関心の高さやがん治療施設計画への期待の大きさが伺えました。放医研では今後とも、多くの一般の皆様にご研究成果を紹介するこのような講演会の開催に取り組んでいきたいと考えています。

最後に、共催として開催に際しご尽力頂いた公益財団法人佐賀国際重粒子線がん治療財団および佐賀県粒子線治療普及グループの皆さん、後援名義を頂いた団体、他関係各位にお礼申し上げます。

企画部広報課

分子イメージング研究戦略推進プログラム(J-AMP) キックオフシンポジウム2010開催報告

文部科学省により実施する「分子イメージング研究戦略推進プログラム」(J-AMP)のキックオフシンポジウムが放射線医学総合研究所と理化学研究所主催、文部科学省共催で平成22年11月24日にオリンピック記念青少年総合センターにおいて開催されました。参加者総数は261名で、大学、医療、研究機関、製薬・医療関係企業、関係省庁からの来場がありました。

本シンポジウムは、「分子イメージング研究プログラム」(第I期)で開発された基盤技術を医療分野に適用し素早く臨床応用に結び付けることを目的として、平成22年度より開始した「分子イメージング研究戦略推進プログラム」(第II期)をオールジャパン体制で推進する戦略についてのものです。

放医研米倉理事長による開会の辞に続き、文部科学省研究振興局倉持局長からご挨拶をいただきました(写真1)。

杉山プログラムディレクターより「分子イメージング研究戦略推進プログラムの目指すもの」として第I期の成果をもとに、がん・認知症分野に重点化し、臨床応用へ向けた共同研究



写真1
文部科学省倉持局長の挨拶



写真2 杉山プログラムディレクターの発表(右上)と座長の米倉理事長(右下)



を行い、実用化への成果創出を目指す戦略について発表されました(写真2)。

次いでPET疾患診断研究拠点の放医研および創薬候補物質探索拠点の理研より研究戦略が示されました。また、「がん分野」と「認知症分野」の共同研究を行う8施設、そして高度専門人材育成を行う5施設より活動内容が発表されました。さらに分子イメージング創薬に関する特別講演2題も行われました。

今回のシンポジウムには様々な分野の方にご参加をいただき、活発な討議がなされ、分子イメージングの実用化への期待がより高まっていることが実感されました。

分子イメージング研究センター運営企画ユニット

第5回分子イメージング研究センターシンポジウム —RI分子プローブの開発と応用—開催報告

平成22年11月29日に第5回分子イメージング研究センターシンポジウムが開催されました(写真1)。本シンポジウムは特にPET薬剤を主としたRI分子プローブの合成から臨床利用、標準化について3つのテーマについて著明な先生方が講演されました。最初のテーマでは、Chi先生(韓国、西江大)が新しい ^{18}F 標識合成法について講演され(写真2)、岩田先生(東北大学)が ^{18}F 標識分子プローブ合成用のマイクロリアクターについて最先端の研究について講演されました。また、当分子認識研究グループの加藤氏が効率的な ^{11}C 標識合成法について講演され、永津氏がPET用中寿命核種の遠隔自動製造法について講演し、加速器による $^{99\text{m}}\text{Tc}$ 製造について有用な知見を報告しました。2番目のテーマでは、日本核医学会分子イメージング戦略会議の議長である井上先生(横浜市大)をはじめ委員である久下先生(北大)、千田先生(先端医療セン



写真1 福村利光実行委員長



写真2 Dae Yoon Chi先生

ター)、栗原氏(放医研)、栗原先生(国立がん研究センター)がそれぞれPET薬剤製造、データ収集法、規制科学、臨床デザインからみた標準化の今後の日本の動向について講演されました。3番目のテーマでは、杉山先生(東大)がマイクロドーズ臨床試験の進展について、須原グループリーダー(放医研)がPETによる効率的な精神・神経疾患治療薬評価について、石渡先生(都健康長寿医療センター)がPETでの動物とヒトへの外挿の有用な知見について、戸塚先生(積水メディカル)が ^{14}C を用いたAMSやLC/MS/MSによるマイクロドーズ臨床試験の優れた成果について講演されました。丸一日の講演でしたが座長及び演者の先生方のご尽力により多くの方々が参加され(164名)、RI分子プローブ利用の関心の高さが伺えました。

分子イメージング研究センター分子認識研究グループ
河村 和紀

山谷泰賀氏が第50回日本核医学会で「第7回日本核医学会最優秀研究奨励賞」と「久田賞(日本核医学会機関誌論文賞)金賞」を受賞



山谷泰賀チームリーダー(分子イメージング研究センター先端生体計測研究グループ)が第50回日本核医学会学術総会(平成22年11月11~13日)にて、次世代PET装置“jPET-D4”に関する二編の論文で「第7回日本核医学会最優秀研究奨励賞」と「久田賞(日本核医学会機関誌論文賞)金賞」を受賞しました。

【概要】

jPET-D4は、PETの感度と空間解像度を両立する4層DOI検出器の効果を実証するために試作した頭部用PET装置です。

奨励賞対象論文では、得られる膨大なデータを高速かつ正確に画像再構成する手法を考案し、jPETによる精細な脳画像を初めて報告しました。久田賞対象論文では、DOI検出器を用いたjPETが、ヒト用装置であるにも関わらず、市販の小動物専用PET装置を上回る性能を実現できる可能性を示しました。

【受賞のことば】

本受賞は、2001-2005年の次世代PET開発プロジェクトと2006年からの実用化研究が実を結んだものであり、前記プロジェクトを率いた村山秀雄先生をはじめ、多大な協力を頂いた所内外の皆様へ感謝します。今後は、jPET研究を通じて生まれたOpenPETやクリスタルキューブなどの新研究に注力します。

志田原美保氏が第50回日本核医学会で「久田賞(日本核医学会機関誌論文賞)銅賞」を受賞



昨年度まで分子イメージング研究センター先端生体計測研究グループに所属していた志田原美保氏(現、東北大学)が第50回日本核医学会学術総会(平成22年11月11~13日)にて、「久田賞(日本核医学会機関誌論文賞)銅賞」を受賞しました。この賞は、今年の機関誌の査読者による投票と編集委員会の審査の後、理事会で決定される賞です。

【概要】

脳神経受容体を対象としたPET検査において、組織中の放射性薬剤が血液中に対しどれだけ集積しているかを表わす分

布体積を推定する手法の一つにLogan Graphical法がありますが、統計雑音PETデータに多く含まれる場合に、定量精度に問題がありました。そこで、対象とする放射性薬剤の体内動態の事前知識を与えることで、定量精度を向上させる手法を提案しました。

【受賞のことば】

PETの動態解析技術向上のため研究を続けていくことがまだまだ必要であると審査の先生方が認識されていると、今回の受賞で実感しました。今後も、この受賞に恥じないような研究活動を続けていきたいと思えます。また、関係者の先生にこの場をお借りしてお礼申し上げます、ありがとうございました。

永野あい氏が日本医学物理学会第100回学術大会にてポスター賞を受賞



日本医学物理学会学術大会にて「重粒子線治療における子宮頸がんの腫瘍縮小モデルと線量評価」という研究発表を行い、ポスター賞を受賞しました。

【概要】

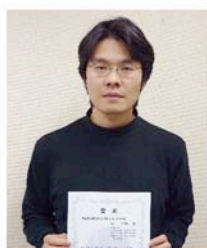
治療期間中での急激な縮小が知られている子宮頸部扁平上皮がんを対象に腫瘍縮小の様子を数値モデルで予測し治療計画を立てた場合について、正常組織への線量評価を

行いました。

【受賞のことば】

今回の思いがけない受賞は私にとって大きな励みになりました。世界に類をみない重粒子線治療の臨床経験がある放医研ならではの研究テーマに打ち込む機会が与えられたことを嬉しく思うとともに、この場を借りて研究のアドバイスを下さった先生方をはじめ、放医研を長年に渡って支えてくださっている皆様へ心より感謝いたします。

藤井啓輔氏が日本医学物理学会第100回学術大会にてポスター賞を受賞



日本医学物理学会学術大会にて「乳幼児CT検査における被ばく線量の評価」という研究発表を行い、ポスター賞を受賞しました。

【概要】

小児は成人よりも放射線感受性が高いと考えられています。本研究では、乳幼児体型を模擬したファントムを用いて、

小児医療施設で日常的に行われている乳幼児CT検査における患者の被ばく線量を評価し、CT装置および撮影条件の違いにより線量が2~5倍程度異なることを明らかにしました。

【受賞のことば】

このような賞を頂き大変光栄に思います。本研究を遂行するにあたり、終始ご支援、ご指導頂いた医療放射線防護研究室の皆様、ならびに実験にご協力頂いた医療機関の先生方に心より感謝致します。

松井真也のウィーン便り(2)

平成22年7月1日からIAEAに派遣されている松井真也さんから第2回目のお便りが届きましたので、紹介させていただきます。

ウィーンに暮らし始めてから5ヶ月ほど経過しました。これまでここで生活してきてウィーンに持ち始めた印象は、「緩い」街だということです。どういう意味で「緩い」のか、少し例を紹介したいと思います。



写真1 クリスマス市で撮影

一つ目は交通機関についてです。ウィーン市内では、地下鉄、路面電車、バスの共通乗車券さえあれば、それらに自由に乗り降りすることが可能です。その際、乗客が有効な乗車券

を持っているか職員がその度に確認したり、自動改札を通したりすることはありません(抜き打ちの検札は随時あります)。この仕組みにより乗客は乗車券の出し入れすることなく、公共交通手段を使って快適にウィーン市内を移動することができるのです。ただ、この状況では一定の割合で無賃乗車する者がいることは明らかです。しかし、無賃乗車による企業側の損失は、無賃乗車する者を出さないために自動改札を導入・維持する費用や職員を配置する費用に比べれば安いものでしょう。おそらくきちんと計算した上で乗客が乗車券を持っているかどうかを「管理しない」ことにしているのだと思います。

二つ目は、働き方についてです。かかりつけ医と面談していたときのことで。私が「湿度が非常に低く、マスクを着用する習慣もないこの街ではさぞかしインフルエンザが流行し易いでしょう」と質問したところ、意外な答えが返ってきました。曰

く、「人口密度が低いせいもありますが、こちらの人はインフルエンザにかかったら喜んで1週間、病気休暇を取りますからそれ程流行しないのですよ」とのことでした。こちらでは、働かせる側は「無理して働かせない」、働く側も「無理して働く意味が分からない」と考えているようです。ヨーロッパ流の「ゆったり」とした働き方を再認識しました。

三つ目は、荷物配達についてです。不思議なことに、家で過ごしていたにも関わらず不在票が入るのです。実は、配達員はアパートに重い荷物を届けるのが面倒なのでしょう、部屋を訪れることなく地階のポストに不在票をばいっと入れるというわけです。古い建物が多くエレベーターが十分整備されていなかったりするため、アパートの上方の階に荷物を届けるのは面倒であることは分かりますが、さすがに最初は閉口しました。こうなると、再配達の仕事はありませんので、受取人が最寄りの郵便局に我慢して荷物を受け取りに行くほかないのですが、それでも現地の人は「そんなものさ」と思っているでしょう。改善の兆しはありません。



写真3 自宅近くの「カールス教会」

どうやらウィーン人は、必要性がなさそうなことは積極的にやらず、ゆったり仕事をし、トラブルにも概ね寛容である「緩い」人たちのようです。“Kann sein”(まあ、あり得るね。)というオーストリア人がよく口にするといわれる言葉がそれを表しています。ルールを徹底し、熱心に仕事をし、行き届いたサービスを提供する、せかせかした国から来た者としては、ウィーンでの生活に拒否反応が出ることも少なくありませんが、このような日本との価値観の違いが、時に不快に、時に心地良く感じられます。そのうち私も、どんなときも“Kann sein”の心境になれるといいのですが。

緊急被ばく医療研究センター運営企画ユニット
(現在IAEAに出向中)

松井 真也



写真2 カフェで撮影



高木義明文部科学大臣が放医研をご視察されました

高木義明文部科学大臣が平成22年11月12日に放医研をご視察されました。米倉理事長、辻井理事等放医研職員の出迎えを受けられ、その後、米倉理事長より放医研の概要説明を受けられました(写真1)。

概要説明に引き続き重粒子線がん治療装置HIMACの治療室、新治療研究棟、分子イメージング研究施設、緊急被ばく医療施設等を約1時間半かけて熱心にご視察されました。平成21年9月の政権交代後、文部科学大臣の放医研訪問は初めてで、放医研が平成22年1月に発足させた緊急被ばく医療支援チーム(REMAT)の活動内容にも関心を示されていました(写真2)。

視察終了後、取材に対し「重粒子線がん治療に対する要望は強く、国としても予算措置をしなければならない。その参考にするため、現場を見てみたいと思った」と訪問理由を語った上で、「日本の最先端技術を応援しなければならない。重粒子はまさに私たちが求める新成長戦略の中核をなすもの」と普及と展開に意欲を示されました。

企画部広報課



写真1 放医研の概要説明を受けられる高木大臣



写真2 REMATの活動に関心を示された高木大臣 (左から3人目) ▶

NIRSテクノフェア2010開催報告

平成22年12月2日に、放医研講堂におきまして、NIRSテクノフェア2010が開催されました。所内外の研究者・技術者等が持つ技術について、ポスターや装置、資料等を見ながら、展示者と対面式で会話し、シーズ・ニーズの情報交換を行う事を目的としました。これまで、2年間、所内で閉じて開催しておりましたが、より広く放医研の技術を紹介するため、所外の方々にも参加していただくこととしました。千葉大学、東邦大学、(財)かずさDNA研究所、(財)日本分析センターからも展示をいただき、関連企業にも声をかけさせていただきました。

その結果、27テーマの展示があり、所外からの44名を含む計159名に参加していただき、各展示場所において熱い議論が交わされ、盛況のうちに終わりました。放医研内の研究施設(重粒子線棟、分子イメージング棟・探索研究棟、静電加速器棟)の見学ツアーもあり、所外からの参加者に好評でした。これらの様子はJCN千葉テレビでも放映されました。

アンケートの結果、継続的な開催の希望が多く、来年度以降も開催を検討してまいります。本テクノフェアの開催に御協力いただいた皆様に深く感謝いたします。

NIRSテクノフェア2010 実行委員会・事務局
基盤技術センター 内堀 幸夫

写真1 展示の様子 ▶



写真2 展示者の集合写真

発行所 **独立行政法人 放射線医学総合研究所**

〒263-8555 千葉市稲毛区穴川4-9-1

発行日：平成 23年 1月 1日 発行責任者：放医研 広報課 (TEL 043-206-3026 FAX 043-206-4062)

ホームページ URL：http://www.nirs.go.jp